第3種郵便物認可

世界史を壮大に読み直す

評　鷲田小彌太
思想史家

著者は、ペルシア帝国の「周辺」にギリシア文明が、モンゴル帝国の「亜周辺」（周辺の周辺）に西欧ならびに日本の近代世界史システム（資本と国家と民族の三位一体）＝帝国主義が成立したと書く。これは「生態史観」（梅棹忠夫）や文化人類学等がすでに明示した歴史認識で、西洋＝文明・非西洋＝非文明とする西洋中心主義史観の否定だ。

では著者の独創はなにか。①世界史を「生産様式」（マルクス）の変化ではなく、より包括的な「交換様式」の変化で読み解き、②歴史遺物と化した「帝国」に新しい光（働き）を見出し、③マルクスやレーニンとは異なった方式で、19世紀後半にうまれ世界戦争の危機をつねにはらむ帝国主義の克服をはかろうという志向だ。

ペルシア、秦、モンゴル等の「帝国」は、多くの部族や国家の統合（支配＝保護・福祉）体である。帝国主義のような一民族国家（英、米、独、仏、伊、露、日）の支配＝膨張とは異なる。著者は、対立・分裂・世界戦争を内包する帝国主義を克服するために、「帝国」の統合原理を高次復活すべきだとする。だがそれにとどまらない。

著者は、ロシア帝国の後継である旧ソ連（共産ロシア）とロシア国家共同体に、清帝国の後継である中共（共産中国）と中国国家共同体に、「世界共和国」（世界国家共同体）の祖型を見いだすのだ。

こうして著者は歴史の遺物にすぎない「帝国」を歴史（文明）の中心に据え直し、さらに20世紀末に歴史の悪夢として葬り去られた社会主義共同体（「帝国」）を歴史の闇から再浮上させる。マルクス者柄谷の「壮大な」試みだ。

だが「世界共和国」は、カントの「永久平和」・「国際連盟」、日本国憲法第9条・「国際連合」の理念を体現するといわれると、著者のあまりにも誇大な「観念主義」に呆然（ぼうぜん）とするのはわたしだけではないだろう。カントの「永久平和」の理念は理論的仮象なのだ。

（青土社　2376円）